

## 日本型の協力モデル、 アジアに構築



拓殖大学学長 渡辺 利夫氏

—渡辺さんは、NICC設立当初から長きにわたってNICCの理事をお務めいただいております。また、本年3月に発足した外務大臣の諮問機関である「国際協力有識者会議」の議長に就任されるなど、わが国の国際協力分野の第一人者として多方面の活躍をされておられます。日本の産業界が取り組む国際協力については、どのようなお考えを、お持ちでしょうか？

日本のODA(政府開発援助)の大きな特徴は、産業インフラへの支援を重視してきたことです。これまで物的インフラへの援助は相当おこなわれてきました。今後は、それらを動かしていく人材面のサポートや、日本の技術、ノウハウの提供、組織や制度の構築に対する「知的支援」が重要になってきています。そうすると、政府だけでは進められない。むしろ、民間レベルの協力が不可欠となります。産業界による国際協力の意義は、まさにそこにあります。政府も「今ほど日本に対するアジア各国の期待と評価が高まっている時期はない」との認識ですし、私も「日本型のODAモデル」はアジアで最も有効に構築出来ると考えています。有識者会議では、企業の経営者もまじえて「世界に誇れる国際協力のあり方」を議論していく予定です。研究機関との関わりで申し上げますと、大学も日本の法制度の紹介など、もっと積極的に「知のODA」に取り組んでいくべきでしょうね。これからは国際協力の

分野でもさらに産学の連携が進められるといいですね。

—NICCは、多くの皆様からご支援をいただきながら国際協力活動を進めており、支援をくださる方々に活動の成果を具体的に発信していく必要があると考えているのですが、目で見てご理解いただくことが難しく、苦勞しています。

国際協力の成果というのは、本来が短期的なものではなく、結局のところ「長いソロバン」をはじきながら考えるということではないでしょうか。その点で言えば、NICCが設立以来、各国から2,000人を超える研修員を受け入れてきた実績は立派な成果だと思います。「継続は力なり」と言います。各国の人材育成に貢献し、日本の組織や制度などに対する理解を深め、親日家を増やすという、いわばソフト面でのインフラ整備があって初めて、日本の企業も現地でも温かく受け入れてもらえるのだと思います。タイで日本の評価が高いのはそういうことですよ。ベトナムでも新しい成功モデルが出来つつあると思います。中国の経済成長は目を見張るものがありますが、一方では深刻な環境問題に直面していますし、ICTが進むインドでも、産業の「現場力」強化はこれからの課題です。同時に、繁栄するアジアの「裏通り」で貧しくひっそりとたたずんでいるような国、例えば東ティモールなどに対しても協力の手を差し伸べるという姿勢が大事です。国際協力の成否は、最終的には、お互いに信頼しあえる関係が構築されるかどうかにかかっていると言ってもいいわけですからね。

—アジアの各国からは、日本の企業の経験やベストプラクティスからもっと学びたいという声が多数寄せられていますので、それらの期待にしっかり応えて行きたいと考えています。貴重なお話、有難うございました。

(聞き手：北川哲夫 NICC専務理事)